

# MS-DOS 6. 2 入門

1996, 7, 30

東京パックス有限会社  
南中野パソコン教室

## はじめに

MS-DOS 6. 2 は、オペレーティングシステムの一つです。オペレーティングシステム（OS）とは、基本ソフトとも呼ばれ、ソフトウェアの一種です。

その役目は、ハードウェアとアプリケーションプログラムとの間にあってプログラムがスムーズに働けるように仲介する役目を果たしています。すなわち、ハードウェア、アプリケーションプログラム、データ及びプログラムの集まりである「ファイル」を上手に活用するための様々なプログラムの集まりです。OSを導入する利点としては次のようなものがあります。

- ・アプリケーションプログラムは、ハードウェアが直接理解できる命令を行う必要がない。
- ・ソフトウェアの開発の際、コンパクトでミスの少ないものを開発できる。
- ・特定の機種に依存しないソフトウェアを作成できる。
- ・利用者がディスク上のファイルのコピーや移動等を行う際、OSの機能を利用して容易に実行できる。

パソコン用の主なOSとしては、MS-DOSの他にWINDOWS 3. 1やWINDOWS 95、OS/2、MAC OS（マックOS）等があります。

本テキストでは、MS-DOS 6. 2（以下「MS-DOS」という。）の使い方を分かりやすくまとめてあります。

なお、MS-DOS及びWINDOWSで使用できるファイル管理ソフトである「エコロジーⅢ Plus」（（株）マイクロデータ社）の概要についてもまとめてあります。

## 目 次

I	MS-DOSの概要	
1.	MS-DOSの歴史	4
2.	MS-DOSの構成	4
3.	コマンド	5
	練習問題	5
II	ファイルの基礎知識	
1.	ドライブとカレントドライブ	6
2.	ファイル	7
	練習問題	8
III	基本操作	
1.	起動	9
2.	コマンドの入力	9
3.	終了	10
4.	リセット	10
IV	基本コマンドの操作方法	
1.	ディスクの初期化	11
2.	ディスクの内容表示	12
3.	初期化ディスクの復元	13
4.	ヘルプ機能	14
5.	ファイルのコピー	15
6.	フロッピーディスクのコピー	16
7.	テキストファイルの作成と編集	17
8.	テキストファイルの内容の表示	18
9.	画面のクリア	18
10.	ファイル名の変更	19
11.	ファイルの削除	19
12.	削除ファイルの復元	20
13.	テキストファイルの印刷	21
	練習問題	21
V	データの分類と整理	
1.	ファイルの分類と整理	22
2.	ディレクトリの作成	23
3.	ディレクトリのツリー表示	23
4.	カレントディレクトリの変更	24
5.	パス指定	24
6.	プロンプトコマンド	25
7.	ディレクトリ名の変更	25

8. ディレクトリの削除	-----	25
練習問題	-----	26
VI バッチ処理	-----	27
VII システム環境		
1. MS-DOSのメモリ管理	-----	28
2. CONFIG.SYS	-----	29
3. メモリーの最適化	-----	29
4. バックアップ	-----	29
5. ファイルの属性	-----	30
VIII エコロジーIII Plusの概要		
1. 起動と終了	-----	31
2. ツリー表示とファイル一覧表示	-----	31
3. ファイルコピーと移動	-----	32
4. ファイルの削除	-----	32
5. ディレクトリの作成及び削除	-----	33
6. ディレクトリのコピーと移動	-----	33
7. ファイル及び文字列の検索	-----	33
8. フロッピーディスクの初期化	-----	33
9. フロッピーディスクのコピー	-----	33
10. テキストファイルの編集	-----	34

## I MS-DOSの概要

### 1. MS-DOSの歴史

1981年、アメリカのIBM社の16ビットパソコンのOS（オペレーティングシステム）として初めて、MS-DOS Ver 1.0が誕生しました。

「はじめに」で触れましたようにOSとは、アプリケーションプログラムとハードウェアとの間に立って、アプリケーションプログラムの指示をハードウェアに伝えるとともにパソコンを使用する人がデータやプログラムなどのファイルの管理がしやすいように工夫されたものです。

1981年当時、IBM社は、他社の8ビットパソコンが好調なことに目を付け16ビットCPUを採用したパソコンの発売を計画しました。この計画は、至急を要していたため、IBM社としては異例なことでしたが、当時は、小企業であったマイクロソフト社にベーシック語等のアプリケーションプログラム以外にOSをも発注することになりました。

マイクロソフト社では、OSを開発する時間的余裕がなかったため、IBM社に対して8ビットパソコンのOSとして不動の地位を保っていたデジタルリサーチ社のCP/Mの16ビット版を採用するよう勧めたものの同社が乗り気でなかったため、マイクロソフト社が自社開発を余儀なくされ、MS-DOSが生まれたのでした。

その後、1983年、Ver 2.0に至ってデジタルリサーチ社のCP/M-86を圧倒して16ビットパソコン用のOSとしての地位を確立しました。

Ver 2.0では、階層的ディレクトリ、I/Oリダイレクト等、当時の大型コンピュータ用OSであるUNIX（ユニックス）の思想を取り入れたものとなりました。Ver 2.0の国際化版である2.11が広く各国に普及しました。

日本では、この頃から徐々に採用されはじめ、当初は、ソフトウェアを購入するとMS-DOSが付いてくる（バンドルされている）時代でした。

1984年のVer 3.0では、2HDフロッピーディスクのサポート、1986年Ver 3.2の3.5インチサイズフロッピーのサポート、1987年のVer 3.3では、ディスクのパーティションのサポート等をサポートしこの頃からバンドルをやめて単体で発売されるようになりました。

その後、1991年、Ver 5.0では、大容量ハードディスクのサポートやメモリの拡張が採用されました。

そして、現在では、Ver 6.2が最新版となっています。Ver 6.2では、ディスクの圧縮機能やメモリ利用の最適化機能等の改良がなされました。

### 2. MS-DOSの構成

コンピュータに電源を入れると本体のメモリにMS-DOS（下記の3つの基本システム）が読み込まれ、キーボードからの命令を受け付けたり、アプリケーションプログラムからの指示を解釈、実行したりすることができるようになります。

MS-DOSは、3つの基本システムから構成されています。

#### ① COMMAND.COM

入力したコマンド（命令）を解釈し、該当するプログラムを実行します。

## ② MSDOS.SYS

MS-DOSの中核をなす部分で、ファイル、メモリ、フロッピーディスクやハードディスク、プリンタといった周辺装置の管理を行います。

## ③ IO.SYS

MSDOS.SYSのコントロール化で動き、ディスク、キーボード、ディスプレイ、プリンタ等へのデータの書き込み、読み込みを行います。

### 3. コマンド

MS-DOSの機能は、コマンドという命令を入力して実行します。

コマンドには、内部コマンドとってCOMMAND.COMに含まれていてメモリに常駐しているコマンドと外部コマンドという外部ファイルに含まれていて命令を受けると呼び出されて実行されるものがあります。

#### 練習問題

次の用語の意味を確認しましょう。

- ① OS
- ② 内部コマンドと外部コマンド
- ③ メモリ
- ④ ハードディスク
- ⑤ 3つの基本システム

## II ファイルの基礎知識

### 1. ドライブとカレントドライブ

#### (1) ドライブ

パソコンでは、フロッピーディスク、ハードディスク、最近では、CD-ROMやMO（光磁気ディスク）を装着する装置をドライブといいます。

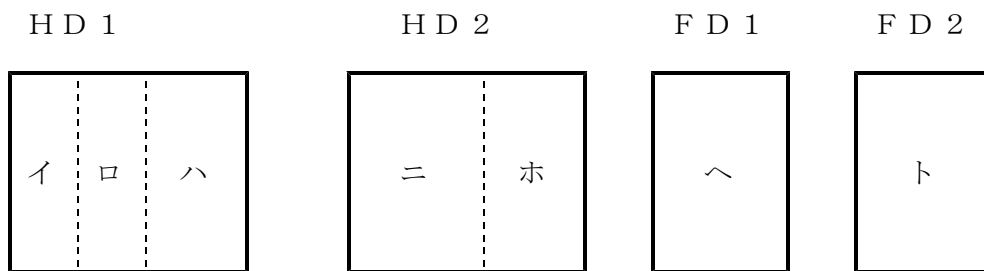
例えば、フロッピードライブ装置のようにいいます。

ドライブは、A, B, C・・・ドライブというようにアルファベットのドライブ番号で識別されます。

NECのMS-DOSでは、パソコンを起動したドライブの最初のパーティーションがAドライブとなり以下、ハードディスク、フロッピーディスク、MO、CD-ROMの順にアルファベットで管理されます。

ここで、パーティーションというのは、1つのハードディスク装置を論理的に複数のハードディスク装置としてMS-DOSに認識されるようドライブを複数個に分かつことを指します。

例を示しましょう。



(上記で破線は、ハードディスクが分割されていることを示しています。)

上記でHD 1のいずれかのパーティーションから起動（MS-DOSを読み込むこと）した場合、ドライブ番号は、イロハ順にA, B, C・・・とつけられます。

また、HD 2のいずれかのパーティーションから起動した場合は、ニ、ホ、イ、ロ、ハ、へ、トという順にA, B, C・・・という番号がつけます。

更にFD 1から起動した場合は、へ、ト、イ、ロ、ハ・・・順にA, B, C・・・とよように番号が振られます。

#### (2) カレントドライブ

現在、MS-DOSが処理の対象としているドライブをカレントドライブといいます。これは、次のように確認できます。

MS-DOSの初期画面は、WINDOWSと異なり黒一色の画面に白色でプロンプト（入力促進記号）A: ¥>が表示されています。

ここで、Aというのがカレントドライブに当たります。

カレントドライブをBに変更するためには、A: ¥>の状態からB: (リターン) と入力することにより、プロンプトが、B: ¥>に変わります。

## 2. ファイル

### (1) ファイル

データやプログラムなどの一連の情報の集まりのことをファイルといいます。ワープロなどでは、「文書」と呼ばれているものに当たります。

MS-DOSでは、データやプログラムをすべてファイルという単位で処理します。

### (2) ファイルの名称

MS-DOSでは、ファイルの名称は、半角8文字のファイル名と拡張子として3文字の計11文字でつけられます。ファイル名と拡張子との間は、「ピリオド」で区切られます。

なお、この全体を通常、ファイル名と呼んでいます。

例えば、「COMMAND.COM」のような場合は、COMが拡張子と呼ばれる部分に当たります。使えないファイル名の例を挙げると「ABC.COM1」、「A12345678.TXT」は、文字数が多いため使用できません。

このほか、ファイル名として使用できない文字があります。

次のものは、使用できません。「”、/、¥、[、]、:、\*、<、>、|、+、=、;、?、-、半角のスペース、」

なお、「\_」（アンダーラインは、使用できます。）

また、使えない文字列としては、MS-DOSで特別な意味を持つ言葉である「CON、AUX、COM1、COM2、COM3、COM4、LPT1、LPT2、LPT3、NUL、PRN」等があります。

### (3) ファイルの種類

#### ① 内容からの分類

ファイルをその内容から分けるとデータが記録されているデータファイルとプログラムが記録されているプログラムファイルに大別されます。

#### ② 記録形式からの分類

テキストファイルは、普通の文字として読むことができるファイルで通常、その拡張子として「TXT」が使用されます。

バイナリファイルとは、テキストファイル以外のファイルで2進数で記録されています。

#### ③ 主な拡張子

ファイルの種類は、拡張子で見当が付く場合があります。以下に例を挙げます。

EXE --- 実行形式のプログラムファイル

COM --- EXEから変換された実行形式のプログラムファイル

SYS --- システムとしてメモリに読み込まれるシステムファイル

INI --- システムの初期化データのテキストファイル

HELP --- ヘルプデータのファイル

BAT --- バッチ処理（後述）のためのファイル

BIN --- システムが使用するファイル

DLL --- システムが使用するプログラムファイル



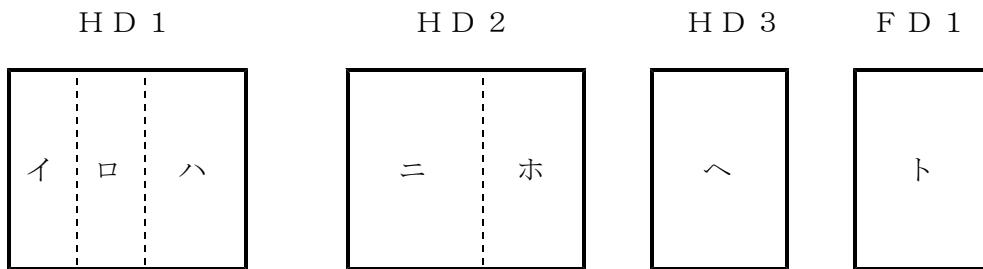
J B W ー ー ー ー 太郎 V e r 6 の文書ファイル  
W J 4 ー ー ー ー ロータス 1 2 3 R 5 J のファイル  
X L S ー ー ー ー エクセル V e r 5 のファイル  
D B F ー ー ー ー d B A S E のデータファイル  
T X T ー ー ー ー テキストファイル  
B A K ー ー ー ー バックアップ用のファイル  
D O C ー ー ー ー ドキュメント（文書）ファイル

### 練習問題

1. 次の用語を確認しましょう。

- ① ドライブ
- ② カレントドライブ
- ③ ファイル
- ④ ファイル名
- ⑤ 拡張子

2. 次の問題を考えましょう。



上記でHD 3から起動した場合に、ドライブ番号がどのようになるかを図に書き入れましょう。

3. 次のファイル名で不適当なものは、どれでしょう。

- ① 井上.TXT
- ② 竹下一郎.BAT
- ③ 尾上菊太郎.COM
- ④ ABC-D.EXE
- ⑤ ABC\_DEF.JBW
- ⑥ 一太郎.JXWA
- ⑦ ABDS?.TXT

### Ⅲ 基本操作

#### 1. 起動

ここでは、すでにハードディスクにMS-DOSがインストール（セットアップ）されている状態から実習を始めましょう。

◎がついている部分は、実習ですので実際に行ってください。

◎ パソコンの電源を入れます。当教室のパソコンA, B, Cでは、ハードディスクのパーティーションが3つに分かれています。また、パソコンDでは、4つに分割されています。

電源を入れるといずれも起動ドライブを選択する画面が表示されますので、一番最初のパーティーションを選択してリターンキーを押して下さい。

起動するとMS-DOSが読み込まれ、後述のCONFIG.SYSとAUTOEXEC.BATのファイルに従ってシステムの環境がセットされます。

ここでは、いずれのパソコンでもメニューソフト「SOS」が自動的に起動するようになっています。

以下の学習では、SOSは、じゃまなためf・10キーを押してSOSを終了させて下さい。プロンプトA: ¥>が画面に表示されます。

#### 2. コマンドの入力

例として日付の入力と時刻の入力を行ってみましょう。

◎ DATEと入力してリターンキーを押して下さい。

すると次のような画面表示がなされます。

現在の日付は、1996-07-20（土）です。

日付を入力して下さい。（年-月-日）：\_\_

（\_\_は、カーソルを表します。）

ここで、何も入力しないでリターンキーを押した場合は、そのままの値が維持されます。

◎ 日付を変更してみましょう。

1996年10月1日としてみましょう。

上記と同様に\_\_位置で1996-10-01と半角で入力しましょう。（以降、リターンを押すという言葉省略して記載します。）

◎ 正しく変更されたかどうか確認してみましょう。

再度、DATEと入力します。今度は、次のようになるはずです。

現在の日付は、1996-10-01（火）です。

日付を入力して下さい。（年-月-日）：\_\_

本日の日付を入力して元に戻しましょう。

- ◎ 時刻も同様に表示、変更することができます。  
そのためには、TIMEと入力して下さい。  
どのように表示されるでしょうか。

### 3. 終了

終了する際は、ハードディスクやフロッピーディスクに読み書きを行っているとき大変なため、DISKランプが点滅していないか確認した上で、一度、STOPキーを押した後に電源を切ります。

- ◎ 実際に終了してみましよう。

### 4. リセット

本体のリセットボタンを押すことにより起動ドライブを切り替えたり、システムが応答しなくなった場合に再起動させることができます。

ただし、リセットするとそれまでのメモリ中のデータやプログラムはすべて消えてしまいますので注意が必要です。

- ◎ 実際にリセットをしてみましよう。

## IV 基本コマンドの操作方法

### 1. ディスクの初期化 (FORMAT)

MS-DOSでは、フロッピーディスクやハードディスクを使用するためには、初期化という操作が必要です。ここでは、フロッピーディスクを初期化しましょう。

(注意：ハードディスクの初期化は絶対にしないで下さい)

#### ① FORMATコマンドの書式

FORMAT (ドライブ番号) : [オプションスイッチ]

ここで、FORMATは、外部コマンドの一つです。ドライブ番号は、A, B, C・・・という番号です。オプションスイッチは、MS-DOSのシステムを転送する場合は、「/S」という文字列をつけます。

#### ② フロッピーディスクの初期化

##### ◎ フロッピーディスクを初期化してみましょう。

FORMAT D: と入力します。

(パソコンDでは、FORMAT G:)

新しいディスクをドライブD (G) に挿入し、  
どれかキーを押して下さい。  
アンフォーマット情報を保存しています。  
目的のディスクは、1MB FDです。

のメッセージの後に進行状況を示すグラフが表示されます。

そして、フォーマットが終了したことを示すメッセージが表示されます。

別のディスクをフォーマットしますか (Y/N)

ここでは、Nを入力します。

なお、フロッピーディスクが書き込み禁止状態 (プロテクト状態) になっていると初期化はできません。その場合は、その旨のメッセージが表示されます。書き込み禁止状態を解除した後に初期化をしましょう。

#### ③ システムディスクの作成

##### ◎ 今度は、MS-DOSのシステムを転送するようにオプションをつけてみましょう。

FORMAT D:/Sと入力します。(パソコンDでは、FORMAT G:/S)

新しいディスクをドライブD (G) に挿入し、  
どれかキーを押して下さい。  
システムを転送するとアンフォーマットできなくなります。  
フォーマットを続けますか (Y/N)

ここで、Yを入力します。

フォーマット中です。

X X X X X バイト 全ディスク容量

X X X バイト システム領域

X X X X X バイト 使用可能ディスク容量

ここで、転送されたシステムファイルは、COMMAND.COM、MSDOS.SYS、IO.SYSの3つです。

④ その他の主なオプションスイッチ

／V ボリュームラベルをつけます。

／Q 初期化済みのフロッピーを再フォーマットする際に使用すると速く初期化できます。

／U 物理フォーマットします。これを行うと後述のアンフォーマットコマンドで再生できなくなります。

／H ハードディスクのフォーマットを行います。（実習では、実施しないで下さい）

## 2. ディスクの内容表示 (DIR)

ディスクの内容（ファイル名等の情報）を表示します。

① DIRの書式

DIR (ドライブ番号) : [オプションスイッチ]

② フロッピーディスクの内容の表示

◎ システムを転送した初期化済みのフロッピーの内容を表示させます。

DIR D: (又はパソコンDでは、DIR G:) と入力します。

ドライブD (G) のボリュームラベルはありません。

ボリュームシリアル番号は、X X X X

ディレクトリはD:¥(G:¥)

COMMAND.COM	X X X X	94-12-08 6:20	---	作成日と時刻
1 個	X X X X	のファイルがあります	---	ファイルの数と容量
	X X X X X X	の空きがあります	---	残っている容量

なお、MSDOS.SYSとIO.SYSは、隠し属性（後述）が規定されているためDIRコマンドでは、表示されません。

③ オプションスイッチを利用

主なオプションスイッチとして／W、／P、／O:があります。

／Wは、1行5つずつ表示します。

／Pは、1ページ毎表示する毎に画面表示が停止します。

／O:Nは、ファイル名でソートして表示します。

:Eは、拡張子でソートして表示します。

文字の先頭に-をつけると降順になります。

◎ カレントドライブ A の内容を表示しましょう。その際、上記の 3 つのオプションスイッチをそれぞれつけてその効果を確認しましょう。

この際、/W コマンドで [DOS] のように [ ] で囲われて表示される名称は、ファイル名ではなくてディレクトリ名（後述）です。

/W オプションをつけない場合は、<DIR> と表示されます。

#### ④ ワイルドカード

DIR コマンド入力時に一定のファイル名の条件を満たすファイルのみを表示させたい場合があります。

この場合にワイルドカードを使用することができます。

例えば、A で始まるファイルを表示させたい場合は、DIR A:¥A\*. \* とすればよいのです。

この \* は、任意個数の任意の文字を表します。

従って、拡張子が EXE であるファイルを表示させる場合は、DIR A:¥\*. EXE とすればよいのです。

もう一つのワイルドカードとして ? があります。これは、1 個の任意の文字を表すことができます。

すなわち、A?????. \* とした場合は、A で始まりファイル名の部分が 6 文字のファイル（又はディレクトリ）とマッチします。

◎ A ドライブの中で AUTO で始まるすべてのファイルを表示させて下さい。

この場合は、DIR A:¥AUTO\*. \* で OK です。

### 3. 初期化ディスクの復元 (UNFORMAT)

初期化してしまった場合、すべてのファイルが削除されます。初期化直後であれば、UNFORMAT コマンドにより復元することができます。

#### ① UNFORMAT コマンドの書式

UNFORMAT (ドライブ番号) [オプションスイッチ]

UNFORMAT コマンドは、ハードディスクに対しても適用できます。（実習では実施してはいけません）

#### ② フロッピーディスクの復元

◎ 先ほどのフロッピーディスクを初期化します。今度は、/S オプションはつけません。

念のため DIR コマンドで表示させてみましょう。

ドライブ D (G) のボリュームラベルはありません。

ボリュームシリアル番号は、XXXX

ディレクトリは D:¥(G:¥)

ファイルが見つかりません。

次に UNFORMAT D: (又はパソコン D では、UNFORMAT G:) と入力します。

注意メッセージに引き続き

システム領域を更新しますか (Y/N)  
と表示されるのでYを入力します。  
引き続きDIRコマンドでCOMMAND.COMが表示されることを確認しましょう。

③ 復元できない場合

次の場合は、UNFORMATコマンドが有効ではありません。  
/Uをつけて物理フォーマットを行った場合  
FORMATした後にファイルを追加した場合  
初期化の際にアンフォーマット情報を書き込む容量が確保できない場合

#### 4. ヘルプ機能 (FASTHELP)

FASTHELPコマンドは、各コマンドの説明 (ヘルプ) を画面に表示します。

① FASTHELPコマンドの書式

FASTHELP [コマンド]

[コマンド] を省略した場合は、各コマンド (アルファベット順に簡単な説明が出ます。1 ページ毎に表示は止まります。表示を止めるには、CTRLキー+CかSTOPキーを押します。

ADDRV	キャラクタ系デバイスドライバをメモリに読み込ませ、新たに実行可能にします。
APPEND	データファイルの検索パスの設定と表示を行います。
ASSIGN	論理装置名に任意の物理装置名を割り当てます。また、ドライブ名を別の任意のドライブ名に割り当てます。
ATTRIB	ファイルに対して4つの属性 (アトリビュート) の設定または解除や表示をします。
AVGDRV	拡張グラフィックスドライバを使えるようにします。
AVSDRV	拡張サウンドドライバを使えるようにします。
BACKUP	ディスクのバックアップを作成します。特に、固定ディスクの内容をフロッピーディスクに保存するときに有効です。
BATKEY	キー入力を受け付け、キー入力に対応した数値をERRORLEVELで返します。

----- 以下省略 -----

## ② DIR のコマンドのヘルプを表示させる

FASTHELP DIRと入力します。

すると次のように表示されます。

ディレクトリ中のファイルとサブディレクトリを一覧表示します。

DIR [ドライブ:] [パス] [ファイル名] [/P] [/W] [/A[[:]属性]] [/O[[:]並べ順]]  
[/S] [/B] [/L] [/C[H]]

[ドライブ:] [パス] [ファイル名]

一覧表示させるドライブ、ディレクトリ、ファイルを指定します。

/P 一画面ごとに停止して表示します。

/W ワイド一覧形式で表示します。

/A 指定した属性のファイルを表示します。

属性: D ディレクトリ R 書き込み禁止 H 隠しファイル  
S システムファイル A アーカイブ - その属性以外

/O ファイルを並べ替えて表示します。

並べ順: N 名前順 S サイズ順 E 拡張子順  
D 日付順 G ディレクトリ優先 - 逆順  
C 圧縮率順

/S 指定されたディレクトリのサブディレクトリ中のファイルもすべて表示します。

/B ディレクトリ名とファイル名だけを表示します。

/L 小文字で表示します。

/C[H] 圧縮率を表示します。/CH はホストドライブのクラスタサイズを使います。

環境変数 DIRCMD にスイッチを設定することもできます。たとえば /-W のように  
- (ハイフン)を前につけると、そのスイッチは無効になります。

## 5. ファイルのコピー (COPY)

ファイルのコピーは、しばしば使用されるコマンドです。

### ① COPY コマンドの書式

COPY (複写元ファイル名) (複写先ドライブ番号) : [オプションスイッチ]

複写元ファイル名と複写先のドライブ名との間は、半角スペース以上空けます。

また、ファイル名には、ワイルドカードが使えます。

### ② ファイルのコピー

#### ◎ AドライブのCONFIG.SYSというファイルをフロッピーディスクにコピーします。

COPY A:¥CONFIG.SYS D: (又はG:)

1個のファイルをコピーしました。

その後、DIRコマンドで確認してみましょう。

### ③ オプションスイッチの使用

オプションスイッチとしては、/Vがよく使用されます。これは、コピー中に書き出された内容と読み出した内容とを比較して誤りがないかどうかを確認しながらコピーする機能です。今後は、/Vをつけてコピーするようにしましょう。

#### ◎ AドライブのAUTOEXEC.BATというファイルをフロッピーディスクにコピーします。



COPY A:¥AUTOEXEC.BAT D: (又はG:)

④ ワイルドカードの使用

これまでと同様にワイルドカードを使用して複数のファイルを一度にコピーすることができます。

◎ AドライブのAUTOで始まるファイル名のファイルをフロッピーディスクにコピーしましょう。

COPY A:¥AUTO\*.\* D: (又はG:) /V

終了したならば、DIRコマンドで確認しましょう。

## 6. フロッピーディスクのコピー (DISKCOPY)

同一容量のフロッピーディスク間の全体のコピーに使用します。大切なデータやプログラムが入っているフロッピーディスクのバックアップコピーを作成することができます。従って、ハードディスクからコピーしたりすることはできません。

① DISKCOPYコマンドの書式

DISKCOPY (複写元のドライブ番号) : (複写先のドライブ番号) : [オプションスイッチ]

なお、複写元と複写先のドライブ番号は異なっても同一でも差し支えありません。

② DISKCOPYコマンドの使用

◎ 同一のドライブ間でコピーしてみましょう。

DISKCOPY D: D: (又はG: G:) と入力します。

ドライブD (G) に送り側ディスクを入れて下さい。

続けるにはどれかキーを押して下さい

.

ドライブD (G) に受け側ディスクを入れて下さい

続けるにはどれかキーを押して下さい

.

コピーは終了しました。

なお、受け側ディスクにフォーマットしていないディスクを使用した場合は、自動的にフォーマットされます。

また、途中で処理を中断する場合は、CTRL+C又はSTOPキーを押します。

③ オプションスイッチ

COPYコマンドの場合と同様に/Vスイッチがあります。

## 7. テキストファイルの作成と編集 ( S E D I T )

テキストファイルの作成は、 S E D I T コマンドで行うことができます。

ただし、あまり大きなファイルではなくて、例えば、メモや CONFIG.SYS 等の小さなファイルの作成、編集に使用する程度のものであります。

それ以上の大きなファイルを作成、編集する場合は、市販のワープロソフトやエディタが必要となります。

### ① S E D I T コマンドの書式

SEDIT [ファイル名]

ファイル名を省略した場合は、起動後に新規作成か編集かを選択することになります。

### ② 新規作成

◎ フロッピーディスクに次の内容を作成し「RENSYU1.TXT」という名称で保存しましょう。  
「春になると心が弾む。ひだまりの中をお気に入りのズックで散歩するのは  
なんと気持ちのよいことか。

ボカボカと暖かいこの季節。春。」

画面上には、 S E D I T のウィンドウが開いています。ここで、 D:¥RENSYU.TXT  
(又は G:¥RENSYU.TXT) と入力します。

すると入力ができる画面になります。この中で文章を入力してみてください。

日本語入力に切り替えるためには、 C T R L + X F E R キーを押して下さい。

かな漢字変換の F E P は、 A T O K 8 です。スペースキーが変換キーとなります。

日本語入力を終了する場合は、再度、 C T R L + X F E R を押して下さい。

入力が終了したならば、ファンクションキーの表示に従って f・1 のファイルを選択  
します。「ファイルを保存して終了」を選択しリターンキーを押します。

### ③ 編集

◎ フロッピーディスクにコピーしてある「CONFIG.SYS」を編集してみましょう。

SEDIT と入力します。

ファイル名の入力欄に D:¥(又は G:¥) と入力します。フロッピーディスクの内容が画面  
に表示されます。矢印カーソルを操作して CONFIG.SYS のところを反転表示にします。

そこでリターンキーを押すとファイルの編集画面になります。ここでは、適当に編集  
して終了します。

## 8. テキストファイルの内容の表示 ( T Y P E )

テキストファイルの内容を表示するには、前述の S E D I T コマンドでもよいのですが  
簡単に画面に表示するだけであれば、 T Y P E コマンドが使用できます。

### ① T Y P E コマンドの書式

TYPE (ファイル名)

なお、ここで、ファイル名というのは、ドライブ番号 (及び後述のディレクトリ名ま  
で込めた) パス名を表します。以降の説明でも単にファイル名と記載しているところが  
あります。)

② ファイル内容の表示

◎ 先ほどのRENSYU1.TXTの内容を画面に表示してみましょう。

TYPE D:¥RENSYU1.TXT (又はG:¥RENSYU1.TXT)

春になると心が弾む。ひだまりの中をお気に入りのズックで散歩するのはなんと気持ちのよいことか。

ボカボカと暖かいこの季節。春。

のように画面に表示されます。

③ ファイル内容の印刷

◎ TYPE D:¥RENSYU1.TXT (又はG:¥RENSYU1.TXT) > PRNと入力して下さい。

プリンタが使用できる状態になっていれば、印刷されます。

④ 一画面に収まらない内容の場合の表示

◎ DIR A:¥ > D:¥RENSYU2.TXT (又はG:¥RENSYU2.TXT) と入力して下さい。

これでD I R コマンドの結果がRENSYU2.TXTに書き込まれます。

◎ このRENSYU2.TXTを一画面ずつ表示させましょう。

そのためには、TYPE D:¥RENSYU2.TXT | MOREと入力して下さい。

このようにすると一画面ずつ表示できます。中断したい場合は、C T R Lキー+C又はS T O Pキーを押します。

## 9. 画面のクリア (C L S)

画面をクリアするためには、C L S コマンドを実行します。

① C L S コマンドの書式

C L S

② C L S コマンドの実行

◎ C L S と入力して下さい。

画面がクリアされ、一番上の行の先頭にプロンプトが表示されました。

## 10. ファイル名の変更 (REN)

ファイル名を変更するためには、REN コマンドを実行します。REN コマンドは、RENAME コマンドと入力することもできます。

### ① REN コマンドの書式

REN 現在のファイル名 新しいファイル名

新しいファイル名のところには、ドライブ番号や後述のディレクトリ名は不要です。

### ② REN コマンドの実行

#### ◎ フロッピーディスクのRENSYU1.TXTの名称をRENSYU.TXTと変更してみましょう。

REN D:¥RENSYU1.TXT (又はG:¥RENSYU1.TXT) RENSYU.TXTと入力して下さい。

実施後、DIR コマンドで確認してみましょう。

## 11. ファイルの削除 (DEL)

不要になったファイルを削除するためには、DEL コマンドを実行します。

DEL コマンドは、DELETE と入力することもできます。

### ① DEL コマンドの書式

DEL (ファイル名)

### ② DEL コマンドによるファイルの削除

#### ◎ フロッピーディスクのRENSYU2.TXTを削除しましょう。

DEL D:¥RENSYU2.TXT (又はG:¥RENSYU2.TXT)

実行後、DIR コマンドで結果を確認します。

### ③ ワイルドカードの使用

ワイルドカードを使用して複数のファイルを一度に削除することができます。

#### ◎ フロッピーディスクの拡張子がTXTのものをすべて削除しましょう。

DEL D:¥\*.TXT (又はG:¥\*.TXT) と入力します。

これで拡張子がTXTのものは、すべて削除されます。

## 12. 削除ファイルの復元 (UNDELETE)

削除した直後であれば、UNDELETE コマンドによってファイルを復元することができます。

### ① UNDELETE コマンドの書式

UNDELETE (ドライブ番号又はファイル名)

ドライブ番号のみの場合は、復元可能なファイルが表示されるのでそこでファイル名の先頭の文字を入力して復元します。

### ② ファイルの復元

#### ◎ UNDELETE D:¥RENSYU2.TXT (又はG:¥RENSYU2.TXT) と入力します。

MS-DOSディレクトリは 1 個の削除ファイルを含んでいます。

そのうち 1 個のファイルが復元できる可能性があります。

MS-DOSディレクトリによる保護をしています。

?RENSYU2.TXT X X X X X X X X X . . . A 復元しますか (Y/N)

(ここでYと入力をする)

最初の文字を入力して下さい。

(ここでRと入力する)

ファイルは復元されました。

DIR コマンドで確認してみましょう。

### ③ 全ファイルの復元

#### ◎ フロッピーディスクのファイルすべてを削除します。

DEL D:¥\*. \* (又はG:¥\*. \*) と入力します。くれぐれもドライブ番号を間違えないようにします。全ファイルを削除する場合は、削除してよいかというメッセージが表示されます。

実行後、DIR コマンドで全ファイルが削除されたことを確認してください。

次に全ファイルを復活させます。

UNDELETE D: (又はUNDELETE G:)

次々にファイルの復元をするかどうかを確認してきますのでYを入力してファイル名の先頭の文字を入力して下さい。

元のファイル名を忘れている場合があります。その場合は、仮のアルファベットを適当に入力して後に内容を確認してREN コマンドでファイル名をつけ直すようにしましょう。

### 13. テキストファイルの印刷 (PRINT)

先ほどは、TYPEコマンドとリダイレクト機能(>)を組み合わせで印刷をしましたがPRINTコマンドを使用して印刷することもできます。

① PRINTコマンドの書式

PRINT (ファイル名)

② PRINTコマンドの実行

◎ RENSYU2.TXTを印刷しましょう。

PRINT D:¥RENSYU2.TXT (又はG:¥RENSYU2.TXT) と入力します。

出力装置を入力して下さい。[PRN]

(ここでリターンを押します)

プリンタの常駐部が組み込まれました。

プリンタが使用可能であることを確認してください。

使用可能であれば、その内容が印刷されます。

#### 練習問題

1. Bドライブのファイル内容をDIRコマンドで表示して下さい。

次にリダイレクト機能(>PRN)を使用して印刷してみましょう。

この場合は、PRINTコマンドと異なり強制的にプリンタから排出しないと出てきません。

2. Bドライブの内容をファイル名順に1行に5つずつ画面に表示させてみましょう。

3. FASTHELPコマンドを使用してFORMATコマンドの説明を印刷させましょう。(1のリダイレクト機能を使用する)

4. DIRコマンドでBドライブの内容をフロッピーディスクにRENSYU3.TXTの名称で書き出して下さい。

この場合も、リダイレクト機能を使用します。ただし、>D:¥RENSYU3.TXTのようにファイルを指定します。

5. 4で作成したRENSYU3.TXTの内容をTYPEコマンドで画面に表示させましょう。

6. 4で作成したRENSYU3.TXTを削除して下さい。

7. 6で削除したRENSYU3.TXTを復元して下さい。

## V データの分類と整理

これまでは、ドライブ番号とファイル名について説明してきました。しかし、MS-DOSでは、1つのドライブの中にディレクトリというボックスのようなものを持たせることができます。ディレクトリの中にディレクトリを含ませることもできます。

この章では、ディレクトリについて学習します。

### 1. ファイルの分類と整理

前述のようにディレクトリを作成することができれば、ファイルの内容毎に異なるディレクトリを作成しそこに保存することでファイルの分類と整理が容易になります。

また、大分類の中に中分類、小分類というように階層型にファイルを分類することも可能です。このようなディレクトリ構造を階層型ディレクトリといいます。

```
A : ¥ --- (ファイル)
      ¥ A B C --- (ファイル)
      ¥ D E F
            ¥ D E F G --- (ファイル)
            ¥ A B C D --- (ファイル)
```

#### ① ルートディレクトリとサブディレクトリ

ここで、先頭のディレクトリを「ルートディレクトリ」と呼びます。これは、階層型の構造を植物に例えるとここが植物の根に当たる部分だからです。

¥記号は、ディレクトリを表す記号です。通常ファイル名と区別するために使用します。このように階層の下のディレクトリをサブディレクトリと呼びます。

#### ② パス名

前述のようにサブディレクトリがある場合は、ドライブ番号とファイル名だけでは、ファイルを一意に指定することができなくなります。

そこでドライブ番号から始まり次々とディレクトリをつないだ名前をパス名といいます。

例えば、A:¥DEF¥DEFG¥RENSYU3.TXTのようにです。

なお、パス名のことを広い意味でファイル名と呼ぶこともあります。

## 2. ディレクトリの作成 (MKDIR)

新しいディレクトリを作成してみましょう。

MKDIRはMDと略記することもできます。

### ① MKDIRコマンドの書式

MKDIR (ドライブ番号) : (¥又はサブディレクトリ名)

### ② ディレクトリの作成

#### ◎ フロッピーディスクにサブディレクトリ「¥ABC」を作成します。

MKDIR D:¥ABC (又はG:¥ABC) と入力します。

終了したならば、DIRコマンドで確認してみましょう。

#### ◎ サブディレクトリ¥ABCの下にもう一つのディレクトリを作成します。

MKDIR D:¥ABC¥DEF (又はG:¥ABC¥DEF) と入力しましょう。

## 3. ディレクトリのツリー表示 (TREE)

ハードディスクのようにディレクトリ構造が複雑でファイルが多く保存されている場合、全体の構造がわかりにくくなります。

そのためにTREEコマンドが用意されています。

### ① TREEコマンドの書式

TREE (ドライブ番号) : [オプションスイッチ]

### ② TREEコマンドの実行

#### ◎ フロッピードライブのツリー構造をみましょう。

TREE D:¥ (又はG:¥) と入力して下さい。

ツリー構造が表示されました。

#### ◎ 今度は、ファイル名を一緒に表示しましょう。

オプションスイッチとして/Fをつけます。

#### ◎ Aドライブのツリー構造を表示させてみて下さい。



#### 4. カレントディレクトリの変更 (CD)

すでに以前にカレントドライブの変更について説明したことがあります。  
今度は、現在、着目しているディレクトリを変更してみましょう。

そのためにCDコマンドがあります。

##### ① CDコマンドの書式

CD (ドライブ番号) : (ディレクトリ名)  
ディレクトリ名には、¥記号をつけて下さい。

##### ② CDコマンドの実行

◎ フロッピーディスクの¥ABCディレクトリにカレントディレクトリを変更してみましょう。

D:

CD ¥ABC

なお、CD D:¥ABCというようにまとめて指定することもできます。

また、CD D:¥ABC¥DEFというようにディレクトリの深いところを指定することもできます。

#### 5. パス指定 (PATH)

パス指定というのは、拡張子がEXE, COM, BATのプログラムファイル名を入力して実行させる場合に通常は、カレントディレクトリ以下を検索してあれば実行するのですが予めPATHコマンドで指定したディレクトリがあればそこも検索してくれる機能を持っています。

##### ① PATHコマンドの書式

PATH (ドライブ番号) : (パス名) [ ; パス名 . . . ]

なお、PATHコマンドのみ入力すると現在、設定されているパスが表示されます。

##### ② PATHコマンドの実行

PATH指定は、通常は、後述のAUTOEXEC.BATの中で起動時に指定されます。

◎ TYPEコマンドでAドライブのAUTOEXEC.BATを表示させてどのようなPATHがあるか調べてみましょう。

## 6. プロンプトコマンド (P R O M P T)

プロンプト (A : ¥>) を変更することができます。

### ① P R O M P T コマンドの書式

P R O M P T 文字列

文字列としては、\$G— (促進記号として「>」を表示)

\$P— (カレントドライブとパスを表示)

### ② P R O M P T コマンドの実行

P R O M P T \$p\$g

カレントディレクトリが次のように表示されます。

D:¥ABC>

## 7. ディレクトリ名の変更 (R E N D I R)

ディレクトリ名を変更します。

### ① R E N D I R コマンドの書式

R E N D I R (ドライブ番号) : (現在のディレクトリ名) (新しいディレクトリ名)

### ② R E N D I R コマンドの実行

◎ フロッピーディスクの¥A B C ディレクトリを¥イハと変更しましょう。

R E N D I R D:¥ABC ¥イハ (又はG:¥ABC ¥イハ)

終了したならばD I R コマンドで確認しましょう。

## 8. ディレクトリの削除 (R D)

ディレクトリを削除するためには、R D コマンドを使用します。この場合は、まず、削除しようとするディレクトリ内のファイルをすべて削除した後にR D コマンドを実行します。R D コマンドは、R M D I R の略記です。

### ① R D コマンドの書式

R D (ドライブ番号) : (ディレクトリ名)

### ② R D コマンドの実施

ディレクトリ¥イロハを削除しましょう。

内部には、ファイルはないのでこのまま次のように削除できます。

R D D:¥イハ (又はG:¥イハ)

終了後、D I R コマンドで確認しましょう。

## 練習問題

1. フロッピーディスクに次のようなディレクトリ構造を作成しなさい。  
その前にフロッピーディスクを/Qオプションで初期化しましょう。

¥

|

--- ¥ A B C

|

¥ C D E

|

----- ¥ イロハ

2. 1で作成したディレクトリ構造をツリー表示しましょう。
3. ¥イロハディレクトリにカレントディレクトリを移動してみましょう。  
また、CドライブのDIRコマンドで表示される内容をそのディレクトリ内のイロハ.TXTというファイルに書き出してみましょう。
4. このイロハ.TXTを¥A B Cディレクトリにコピーしましょう。
5. ¥イロハディレクトリを削除しましょう。

## VI バッチ処理

処理を行いたい順にコマンドを並べてファイルに書き込んでおきます。この際のファイルの拡張子は、必ず、BATとします。

そしてそのファイルをコマンドとして入力すると書き込まれた処理が一つのコマンドであるかのように実行できます。

MS-DOSが読み込まれた直後に自動実行されるAUTOEXEC.BATが一つの例です。

```
ECHO OFF
SET JW2P=A:¥TAR05;A:¥JW2
SET HELP=A:¥MINE
SET JSP_DIR=A:¥JSP
SET TEMP=A:¥DOS
SET DOSDIR=A:¥DOS
PATH A:¥JUST5;A:¥TAR05;A:¥DOS;A:¥JSP;A:¥DOS;A:¥EPREMOTE
A:¥SOS¥SOS
```

上記でECHOは、画面に表示させるかどうかを決めます。

ECHO OFFは、それ以降のコマンドを画面に表示させないためのものです。

また、SETコマンドは、メモリ中にそれぞれ特別の文字列に対して値をセットしておくもので種々のプログラムの実行に際して必要となります。

多くは、アプリケーションプログラムのインストール（登録）時に自動的に書き込まれます。

PATHは前述のとおりです。

最後のA:¥SOS¥SOSは、呼び出すプログラムとして「SOS」という名称のプログラムファイルを呼び出すことを命令しています。

## VII システム環境

### 1. MS-DOSのメモリ管理

MS-DOSは、コマンドを実行する際にメモリに読み込んで実行します。  
このメモリには、いくつかの種類があります。

なお、メモリの量は、バイトという単位ではかられます。1バイトは、8ビットです。  
また、1KB（キロバイト）というのは、1024バイトを意味します。

#### (1) 基本メモリ

コンベンショナルメモリともいいます。640KBの大きさがあります。

基本メモリの下部は、MS-DOSが占めその上部をPRINT.SYSや日本語のFEP（フロントエンドプロセッサ：かな漢字変換を行うもの）等の常駐デバイスが占めています。アプリケーションプログラムは、これらの上部に読み込まれることになります。

その意味で基本メモリの空き領域は大きい程良いのです。

空き領域を大きくするためには、DOSの一部を後述のHMAに移動したりデバイスドライバの一部をUMBに移動したりする等の方法があります。

#### (2) システム予約領域（UMA）

640KBから1MBまでの間をいいます。ここにもデバイスドライバやデータの入出力を制御するプログラムなどが配置されています。

なお、ここにも空き領域があるため基本メモリから移動できるドライバなどが利用することがあります。

#### (3) ハイメモリ（HMA）

1MB超の64KB分の領域です。

通常、DOSプログラムの一部を移動することができます。

#### (4) 拡張メモリ

1MB超の部分をいいます。ここは、アプリケーションプログラムが使用できる領域です。そのメモリ規格には、EMSとXMSとがあります。

## 2. CONFIG. SYS

MS-DOS 起動後にシステムの環境をセットするために CONFIG. SYS というテキストファイルがあります。

例を挙げましょう。

FILES	= 99	同時に OPEN できるファイル数を規定
BUFFERS	= 20	ディスクから先読みするデータ量を指定
DEVICE	= MELEMM.386 /HM /M D0, D4, DC	仮想メモリマネージャの読み込み
DEVICEHIGH	= MELCACH2.SYS 2560	ディスクキャッシュの読み込み
DEVICE	=A:¥ATOK8¥ATOK8A.SYS /UCF=A:¥ATOK8¥ATOK8.UCF	
DEVICEHIGH	=A:¥ATOK8¥ATOK8B.SYS	上記 1 行と合わせて日本語環境を構築
DEVICEHIGH	=A:¥DOS¥PRINT.SYS	PRINT ドライバを登録
LASTDRIVE	=Z	最後のドライブ番号を指定
SHELL	=A:¥COMMAND.COM A:¥ /E:512 /P	COMMAND.COM の存在場所等の情報
DOS	= HIGH, UMB	DOS の一部を HMA 及び UMB に移動するように指示する。

上記で DEVICE= と DEVICEHIGH= との違いは、後者の方が 1 MB 超の部分に読み込むことを指定している点異なる。

要は、できるだけ基本メモリ領域の容量を確保することが重要な点となっています。従って、後述するようにメモリの最適化を図るプログラムが用意されています。

## 3. メモリの最適化 (MEMMAKER)

多くのプログラムが実行する際に基本メモリ領域をできるだけ広く必要としますが基本メモリには、DOS や日本語変換ドライバ等が常駐している場合もあり、640KB から相当減少している場合があります。

MEMMAKER は、そのような場合にメモリを最適化するようにつとめます。

## 4. バックアップ

### (1) フロッピーディスクのバックアップ

DISKCOPY コマンドで実施して下さい。

### (2) ハードディスクのバックアップ

① ハードディスクの一部のディレクトリの内容をバックアップするためには、XCOPY コマンドが適しています。

XCOPY コマンドの書式は、XCOPY (複写元) (複写先) [オプションスイッチ]

オプションスイッチでは、/S を指定しておくことすべてのサブディレクトリまで含めてコピーすることができます。

ただし、後述のシステム属性、隠し属性のファイルは、コピーすることはできません。その場合は、COPY コマンドを使用して下さい。

② ハードディスク全体や一枚のフロッピーに収まらない場合のバックアップ

BACKUP コマンドで行います。

Aドライブの全体のバックアップをとるためには、BACKUP A: D: /Sと入力します。

ここで、D:は、フロッピードライブです。また、オプションスイッチの/Sは、サブディレクトリもバックアップするために必要です。

逆にバックアップしたフロッピーディスクから元に戻すためには、RESTORE コマンドを実行します。

RESTORE D: A: /Sと入力することにより復元することができます。

## 5. ファイルの属性 (ATTRIB)

ファイルの属性とは、4つあります。書き込み禁止 (R)、アーカイブ (A)、システムファイル (S)、隠しファイル属性 (H) の4つです。

属性のセットは、ON/OFFの2とおりがあります。

① ATTRIB コマンドの書式

属性をONにする場合

ATTRIB + (属性を表す文字) (ドライブ名又はファイル名) [オプションスイッチ]

属性をOFFにする場合

ATTRIB - (属性を表す文字) (ドライブ名又はファイル名) [オプションスイッチ]

② 属性の意味

書き込み禁止属性——ONになっている場合、削除、内容変更、ファイル名の変更等ができません。

アーカイブ属性——ファイルが更新されると自動的にONとなります。

システムファイル属性——システムで使用されるファイルのみONとなっています。

例えば、MSDOS.SYSのようなファイルです。

隠しファイル属性——ONになっている場合は、DIR コマンドで表示されません。

## VIII エコロジーⅢ Plus の概要

エコロジーⅢ Plus は、(株) マイクロデータ社の製品でこれまで学習してきたDOS コマンドを直接、入力することなくメニューから実施したい内容を選択するだけで実施できるソフトです。

### 1. 起動と終了

#### (1) 起動

◎ 起動は、SOS の画面からエコロジーを選択してリターンを押して下さい。

するとトップウィンドウが開きます。この画面では、左側に現在のドライブのツリー構造が表示され、右側には、カーソルがある部分のディレクトリのファイル名が表示されています。

#### (2) 終了

◎ ESC キーを押します。終了してよろしいかというメッセージが出ますので Y 又はリターンを押して下さい。

### 2. ツリー表示とファイル一覧表示

左側には、ディレクトリ構造のツリー表示が右側には、ファイル名が表示されています。右側のファイル名は、ファイルが多い場合は、その一部が表示されています。

◎ すべてのファイルとその他の属性を表示するためには、↑↓の矢印キーでディレクトリを選択してリターンを押します。例としてドライブ A をとってみましょう。

そうするとファイル一覧が表示されます。ファイル一覧には、ファイル名の他に、サイズ、生成年月日、時刻、属性が表示されています。

ファイル名一覧画面から元の画面に戻るためには、ESC キーを押して下さい。

#### (1) ファイルのソート

◎ S を押します。画面の下段にアルファベットのメニューが表示されていますので分かりやすいと思います。

S を押すとどのような順にソートして表示するかどうかのメニューが現れます。

D を押すと生成年月日の新しい順に、-D では、古い順に、N では、ファイル名順にというようにソートされ、結果が表示されます。

#### (2) ファイルの生成年月日の変更

A を押します。ファイルの属性の変更画面が表示されます。

矢印キーを下におろすことにより生成年月日を変更することができます。



### (3) 属性の変更

前述のように隠しファイルや書き込み禁止ファイルは、削除することができません。しかし、どうしても削除したい場合があります。そのような場合は、ここで属性をOFFにする事ができます。

## 3. ファイルのコピーと移動

ファイル一覧画面でファイルをコピーしたり移動したりすることができます。

### (1) コピー

◎ Aドライブの¥DOSディレクトリを例に取りましょう。

一覧画面で、Cを押します。するとファイルを選択することができます。コピーしたいファイルを選択してはリターンキーを押します。コピーされるファイルが反転表示されます。ここでは、先頭のファイルから5つのファイルをコピーしてみましよう。

次にGを押します。するとコピー先のドライブを選択できますのでドライブ番号を選択します。ここでは、フロッピーディスクのドライブ番号を選択します。(D又はG)

するとコピー先のディレクトリ構造が別のウィンドウに表示されますのでここでコピー先のディレクトリを選択してリターンを押します。

最後にコピー条件が表示されます。コピー先に同一のファイル名のファイルがあった場合に最新のファイルのみをコピーする場合は、Uが条件として入力されています。属性を無視して強制的にコピーする場合は、Fを追加します。

コピー終了後にESCキーを押して元の画面に戻ります。

### (2) 移動

移動は、コピーの条件でMを入力します。コピー終了後に移動元のファイルを削除します。

## 4. ファイルの削除

◎ コピーと同様にファイル一覧画面にします。ここでは、フロッピーディスクのドライブとします。

Dを押して積ほどコピーした各ファイルをリターンキーで選択して(選択し間違った場合は、スペースキーを押します)Gを押します。

なお、書き込み禁止属性の付いているファイルは、削除できませんのでどうしても削除したい場合は、Aを押して書き込み禁止属性を解除した後に削除して下さい。

## 5. ディレクトリの作成及び削除

左側がツリー構造の画面にします。

### (1) ディレクトリの生成

ディレクトリを生成したいディレクトリのところに矢印キーでカーソルを持っていきます。そこでMを押すと緑色の長方形が表示されます。その中にディレクトリ名を入力すればよいのです。

◎ ここでは、フロッピーディスクに¥D Sというディレクトリを作成してみましょう。

### (2) 削除

(1)と同様に反転表示される部分を移動します。そこでDを押します。確認のメッセージが出てそれに答えれば、ディレクトリ及びその中のファイルすべてが削除されてしまいます。注意して実行して下さい。

◎ フロッピーディスクに作成した¥D Sというディレクトリを削除しましょう。

## 6. ディレクトリのコピーと移動

### (1) コピー

ツリー構造の画面で削除と同様にディレクトリを選択してCを押します。そしてコピー先のドライブを選択して、後はファイルのコピーと同様にコピー先のディレクトリを選択して実行します。

### (2) 移動

コピーの場合同様です。条件の中でMを指定すれば、移動になります。

## 7. ファイル及び文字列の検索

ツリー表示画面でFを押します。その後、ファイルか文字列かを選択した後にファイル名又は文字列を入力して検索範囲をシステム全体とするか当該ドライブのみとかするかを決めます。

そして実行します。

見つかった場合は、次のウィンドウに表示されます。

ファイルの場合は、コピーすることもできます。

◎ ATTRIBというファイルを見つけてみましょう。拡張子は不明なので\*としておきます。

## 8. フロッピーディスクの初期化

ツリー表示画面でUを押してユーティリティの実行画面にします。その中でフロッピーディスクの初期化を選択して実行して下さい。

◎ 実際に実行してみましょう。

## 9. フロッピーディスクのコピー

初期化と同様にUを押してユーティリティ画面にしてフロッピーディスクのコピーを選択、実行します。

## 10. テキストファイルの表示と編集

ファイル一覧画面にします。

表示したいファイルを反転表示した後にVを押します。

するとファイルの内容が画面上部に表示されます。

編集したい場合は、更にEを押しますと上部のウィンドウにカーソルが移動して編集することもできます。

◎ AドライブからAUTOEXEC. BATをフロッピーにコピーして編集してみましょう。

[不許複製]

定価 1,500円(税込み)